

総務産建常任委員会所管事務調査報告書

本委員会の所管事務調査として、閉会中の継続調査に付託された事件について、申し出した調査を終えたので、会議規則第77条の規定により報告する。

平成28年12月13日

上富良野町議会議長 西 村 昭 教 様

総務産建常任委員長 中 澤 良 隆

記

調査事件名 先進市町村行政調査について

1 調査及び研修の経過

本委員会は、平成28年第1回定例会において閉会中の継続調査として申し出した「友好都市提携の方向性について及びジオパークによる地域活性化について」を、平成28年10月17日から20日までの間、三重県津市及び静岡県伊豆市を視察し、調査を行った。

2 調査の概要

(1) 友好都市提携の方向性について

三重県津市は、三重県中部に位置する都市で人口約28万人の三重県の県庁所在地である。津市と上富良野町の交流は、歴史的な結びつきから平成9年7月30日に上富良野町開基100年を記念し、友好都市提携としての調印が行われた。

また、来年には提携後20周年を迎えることになることから、本委員会としては、津市の特長や実態把握を目的に視察を行ってきた。

① 津まつり会場とお城西公園

例年10月の第1土・日曜に行われる津まつりの会場となるフェニックス通り及びメイン会場となるお城西公園を視察した。

津まつりは、「八幡神社祭礼」と呼ばれる歴史と伝統のある祭りであったが、平成に入ってから「よさこい」や「ディズニーのパレード」など様々な工夫が行われてきたことから、近年は、40万人近くの人出がある大規模な祭りとなっている。また、お城西公園には、津市と上富良野町の提携記念碑が設置されていた。

② 津市議会議場

現在の議員定数は36名となっている。現在の津市は平成18年1月1日に10市町村が合併し、新しい津市が誕生した。合併前の議員数は166名で、合併後には36名の定数と大きな決断があったことがうかがえる。

③ 津市安東小学校

平成9年7月30日に上富良野西小学校と安東小学校は、姉妹校の提携を行っている。安東小学校の前庭には姉妹校提携を記念した碑が建立されており、校舎内には小規模ながら上富良野コーナーがあり姉妹校同士の過去の交流の様子などが展示されていた。

④ 道の駅「津かわげ」

平成28年4月28日開駅。国道23号中勢バイパスと国道306号が交差する交通の要所に位置する道の駅である。観光客よりも地元の人が日常生活で利用できる道の駅を目指しており、開駅3カ月で来駅者が50万人を突破という他に類のない実績を残している。

運営は、会社の食堂やローソンを運営する新三商事株式会社に委託されており、民間の良さが十分に発揮されていた。今後、この道の駅での上富良野の物産や農作物販売の可能性も高いことが、運営会社との意見交換でうかがうことができた。

⑤ 香良洲歴史資料館

旧海軍飛行予科練習生の遺影、遺書、遺品などが展示されており、資料館の学芸員の案内で館内を視察した。予科練生の家族に宛てた手紙などを目に見ると、平和の大切さを改めて心にする機会となった。

⑥ 防災物流施設兼コミュニティーセンター

平成28年4月1日に供用開始された防災施設を視察した。この施設は、災害時の生活物資の緊急輸送、被災者救護の拠点としての活用、津波避難ビル、指定避難所として利用できる施設となっている。

また、平常時はコミュニティーセンターとして防災学習や地域活動に利用できる工夫もなされ、建物の管理については地元自治会に委託されていた。

⑦ 一身田寺内町

江戸時代より真宗高田派本山の専修寺を中心に寺内町として発展をしてきた一身田寺内町を、ボランティアの方に案内していただき、名所旧跡、またその歴史、文化財、見どころを、さらには吉田貞次郎生家にも案内され、改めて津市と上富良野町の関係の深さを認識することができた。

(2) ジオパークによる地域活性化について

静岡県伊豆市には、ジオパークの拠点となる「ジオリア」が設置されており、伊豆半島ジオパーク推進協議会の事務局もこの施設内におかれている。事務局体制として、事務局長兼ジオリア館長1名、県派遣職員1名、市町派遣7名、専任研究員1名(地質)、臨時職員1名の11名体制で、現在は世界ジオパーク認定に向けての活動を進めている。伊豆半島ジオパークは、沼津市、熱海市、三島市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町の伊豆半島7市8町で構成され、平成24年に日本ジオパークの認定を受けている。

① 伊豆半島ジオパーク推進協議会

ジオパークを指向した経緯は、伊豆は熱海、伊東、修善寺、伊豆長岡、熱川な

ど名立たる温泉が多く、黒潮海流に乗った新鮮な魚に加え、わさび、みかんなどのグルメ、また、熱海の梅、河津ざくらなど有名な日本有数の観光地であった。

しかしながら伊豆半島の大きな課題は、似たような温泉観光地が多い中、それぞれの活動が主体となり一体感に乏しいことであった。「伊豆はひとつひとつ」から「伊豆はひとつ」を推進テーマに各市町が連携を図ることとなり、ジオパーク認定を目指すこととなった。

また、30年以上伊豆の成り立ちなどを研究してきた静岡大学の小山真人教授が火山学習活動を進めてきていたことから、NPOなど人材が育ちつつあったことと、静岡県知事の川勝平太氏が伊豆半島全体でジオパークに取り組むのであれば県をあげて支援するとの提案により、一挙に認定に向けての活動が加速され、平成23年には7市8町による「伊豆半島ジオパーク推進協議会」が設立されこととなった。その後、伊豆半島ジオガイド養成講座開催により36名のジオガイドが認定となり、地域研究会やジオツアー、視察の受入れなど200回以上の活動も同時に進められたことが評価され、平成24年9月に日本ジオパークネットワークへの加盟が認められた。

運営組織体制としては、推進協議会の総会、そのもとに幹事会があり、学術部会・教育部会・ツーリズム部会・保全部会の専門部会が設置されている。

顧問として静岡大学防災総合センターや環境省、国土交通省など5つの国の出先機関が参画している。

伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」は、ジオパークの運営、ガイド養成、広報・イベントなどを総括しており、静岡県と各市町からの派遣職員11名で運営を行っている。

また、伊豆半島全体には13か所のビジターセンターが設置されている。

② 伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」

伊豆半島ジオパークの総合案内機能と事務局機能を有する拠点施設で、平成28年度から運営が開始された。施設内には、「地球を読む」と題した伊豆の成り立ちシアターが上映されるとともに、伊豆半島形成の紹介、海底火山の読み方、陸上火山の眺め方、生き物、恵み、文化、自然災害などの展示がなされていた。

また、プロジェクションマッピングが設置され、赤色立体地図により伊豆半島の様々なデータが一目で理解ができるよう工夫がなされていた。

③ 伊豆市のジオパークの取り組み

伊豆市は、伊豆半島ジオパーク推進協議会に職員1名を派遣している。

また、「天城ビジターセンター」を「道の駅天城越え」内に、平成25年にオープンさせ、職員1名を配置している。

ジオサイトとしては、マグマが急激に冷やされてできた「柱状節理」で形成された旭滝を始め、浄蓮の滝、スコリア丘、白鳥山、滑沢溪谷、八丁池などがあり、伊豆総合高校自然科学部の生徒が講師役となりジオツアーの開催をしているほか、ジオガイド協会認定のガイドが、地域での学習活動や団体を対象に講座の開催などを行っている。

3 研修のまとめ

友好都市提携の方向性に関しては、津市における公共施設の建設や施設運営にあたり地元自治会と共助のもとに運営されている実態などを視察・調査することができた。また、津市と上富良野町は、三重県安東村(津市)出身の田中常次郎を総代とする一行8名が草分地区に入ったことから、記念すべき上富良野町の開基100年の平成9年7月30日に友好都市提携が結ばれ、平成29年の来年には、節目の20周年を迎えることとなる。これを機に、さらに意義深い交流を進めていく必要がある。

現在までの交流をベースに、さらなる経済交流の進展と、友好都市提携を将来支えていく人材を育てていくために、互いの町や市を訪問し合い理解する人たちを増やしていくことが重要であると考えます。

次に、ジオパークによる地域活性化については、伊豆半島ジオパーク推進協議会の事務局を担う伊豆市を中心とした調査を行った。

ジオパークミュージアム「ジオリア」は、子どもたちからお年寄りまで誰でもが理解しやすい内容で、見る、聞く、触る五感に訴えた体験ができ、総合案内機能と情報発信機能が十分発揮される施設となっていた。

また、「伊豆はひとつ」を合言葉に、それぞれの自治体が個々に活動していたのがジオパークの認定を受けることにより一体感が生まれ、地質や歴史・文化を観光や教育分野へと発展させており、さらにはガイド養成にも力を注ぎ、毎年認定ガイドを増やし、高校生からお年寄りまで多くの人々に関わりを持たせていることが大いに参考となった。

今回の研修先の伊豆半島ジオパーク推進協議会は7市8町という構成であり、参加市町村の取り組み姿勢や考え方には温度差もあるようだが、本町が美瑛町と進めている「十勝岳ジオパーク」は、相互理解と統一した考え方で地域活性化のため、日本ジオパークの認定に向けて、さらなる努力をされることを期待する。